

1998-1

# 雑誌を読む

1月

## 指導者論

- ◆橋本龍太郎に宰相の資格を問う(中西輝政) —文藝春秋  
ベストの選択は橋本・小沢が歴史的和解をする
- ◆対談 逆風の中の指導者論(平岩外四、宮城谷昌光) —中央公論  
社長は孤独。自分でいかに修行していくか(平岩)
- ◆この国はどこへ向かうのか(田原総一朗) —中央公論  
リベラルと新保守の混在する自民党の分裂が必要だ
- ◆対談 大恐慌か、世界戦争か(宮尾攻、福田和也) —諸君!  
グローバル・スタンダードを超える構想を(福田)
- ◆日本再浮上の構想(島田晴雄) —ポイス  
省庁再編はようかんの切り分け。「量の行政改革」を
- ◆今想え、西郷南洲「立国の気概」(江藤淳) —This is 読売  
グローバル・スタンダードはデ・ファクトに過ぎない

### 橋本 孤立を恐れ大勢傍観

橋本三郎さん 日本を厳しく状況  
を浮き彫りにする論文が目立ちまし  
た。中西輝政先生の「橋本龍太郎に幸  
相の資格を問う」(文藝春秋)は、自  
社体制ではこの難局を打開できない  
ので、橋本政権は小沢一郎氏と歴史的  
な和解をすべきであるという率直かつ  
大胆な指摘です。田原総一朗さんの「こ  
の国はどこへ向かうのか」(中央公論)  
は、自民党内の自社系対保・保派と  
いう角を、リベラル対新保守と名付  
けるべきだとしています。現在の日本



橋本三郎さん



山下悦子さん



中西輝政さん

### 山下 システムが不在導く

### 中西 求められる意思中枢

を「頭のなかに」にならざるえ、頭  
を付けるには自民党がその対立軸  
を分けて、野党を含めて再編成を図  
るのよとの見方です。「諸君」で  
古森義久さんが紹介している米国の日  
本研究者の一人は、三塚盛相、宮沢元  
首相、大蔵省の権原財務官の署名を筆  
げ、彼らはタメナリリーダーであるとい  
っています(USレポート)。この指  
摘が正しいかどうかは別にして、だれ  
が指導者として不適格なのかを国民が  
検証するスタイルを身に付けていないと  
正しい指導者を選ぶことはできない。  
山下悦子さん 経済の危機感から  
橋本首相や橋本内閣に対する厳しいス  
トレートな指摘が多かった。宮尾攻さ  
んと対談「大恐慌か、世界戦争か」  
(諸君)で福田和也さんは、「官民  
(元首相)にしても橋本(首相)にし  
ても、ジャパン・リミテッドがつくよう  
な体制を作ってきた人たちが「イン  
シアチブをとっている限り、何もでき  
るわけがない」とほざきつづけている。  
企業・金融機関のトップや政治家の

「自己保身」の強さが「恐怖」を導い  
ていると、タメな指導者像を明確にし  
ています。武村正義さんと山口二郎さ  
んの対談「橋本行進」はなぜ挫折し  
たか(世界)や「アエラ1/19」の  
「橋本政権 失政続々でもタラシ  
な」など、首相のリーダーシップには厳し  
い批判がなされているのですが、では  
政治的にどういうビジョンがあるのか  
最近、海外の雑誌なども指導者論特  
集が目につきます。冷戦が終わり新し  
い枠組みについて議論の中で、抜け  
落ちていたのが指導者(リーダー)の  
トだったのかも知れません。注目した  
のは、平岩外四さんと宮城谷昌光さん  
の対談「逆風の中の指導者論」(中央  
公論)です。平岩さんが副社長と社長  
との差は歴然たるものだ、社長の「孤  
独」を強調するところには、トップに  
なった瞬間に分かる世の中のフイロに  
いがある。

「自由帳」  
新年早々に訪れた、三年お  
りの香港。表面から見ると限  
り平穏で目立った変化はない。  
昨年後半の株暴落も、新型香  
港ウィルスの大騒ぎも、「ニ  
ューズウィーク」1/14、  
どこかよその世界のことのよ  
うだ。

「自由帳」  
タリは立派だ。中国各地の  
新聞雑誌などを細大漏らさ  
ず収集し、大陸のどこでも  
研究条件がよい。欧米や日本  
はもちろんだ、中国からも毎年  
大勢の学者がここへやって  
くる。

「自由帳」  
学内で何人かに話を聞く。  
香港在住が長いAさんは七  
月一日の返還前後、基本的  
な変化はないと言った。トップ  
語の併記だ。講義も、英語

「自由帳」  
アメリカから数年前に赴任  
したBさんは、別な意見だ。  
七月一日以降は町へ出るた  
び、何か不愉快な目にあっ  
た。何かがおかしい、不安な  
感じがする。半年、今後を占  
う香港の  
正念場は注目しよう。  
(橋本三郎)

「自由帳」  
「諸君」の福田さんと宮尾さんの  
対談にうかがえるのは、先月取り上げ  
た江藤淳さんの「第二の敗戦」という  
メッセージです。現代の特集「日本を  
三流国」にした四流のリーダーたちで、  
江藤さんが団塊世代を「パプルのB  
C級戦犯」だとしているのも目を引き  
ました。敗戦時に日本を立ち上げら  
れたのが当時の4代50代だったわけ  
で、団塊世代が今の第二の敗戦から日本  
を立ち直らせなければならぬが、それ  
だけの資力がこの世代にあるのか。

「自由帳」  
北京語/広東語のうち好きな  
言語で行ってよいという  
言葉を打つ。  
どちらが正しいか、いまは  
誰にもわからない。香港から  
二ワトリは一掃されたけれ  
ど、賢明な北京が、金の卵を  
産むガチョウ、香港を絞め殺  
すはずがないと思いたい。と  
は言っても、復帰一年目の後  
半は、六月四日の天安門事件  
記念日をピークに、むしろし  
ら半年、今後を占う香港の  
正念場は注目しよう。  
(橋本三郎)

### ◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて2月号)

橋本三郎	山下悦子	中西輝政	編集部
①バイク事故が『HANA-BI』の絵になっ た(北野武、蓮實重彦) —This is 読売 ベネチア映画祭グランプリ作品の舞台裏を、 監督・北野氏と批評家・蓮實氏が語り合う ②日中米を信頼のトライアングルに(チャルマ ー・ジョンソン) —アステイオン冬号 日本はアメリカの中国封じ込め追従をやめ、 安保条約を改定、中国との共存を図れと主張	①ルポ 不登校の中学生諸君へ(石川忠司) —中央公論 怠惰なダラダラ人間が、「勤勉」へ収れんさ される近代的な管理システム—学校教育を超える ②対談 ヤクザを必要とする日本というシステ ム(ヤコブ・ラズ、朝倉喬司) —世界 財界と総会屋の癒着、金融および政界とも関 係のある暗い闇の勢力について語る	①特集 中央アジア再発見(山内昌之、松本健 一、杉山正明ほか) —This is 読売 新しい「日本外交のフロンティア」ともいえ る、中央アジアの未来を考える多角的な特集 ②それでもアジア経済は甦る(ジェフリー・サ ックスほか) —中央公論 アジア悲観論を戒めるが、日本に残る「やせ 我慢」のアジア楽観論の危うさもわかる	①対話 国民国家を越えて(網野善彦、岸田秀) —大航海No20 特集「国家が消滅するとき」の一つ。国家統 制の弱かった中世日本を通し国家像を見直す ②特集「発明の世紀」前・後編 —ニューズウィーク12/31・1/7、1/14 労働・家庭・医学における今世紀のテクノロジ ーの進歩を検証し、21世紀の生活を展望する

バル化とは違う位相で、日本人が生き  
ていく空間をどうつくっていくかとい  
う発想が大事だとしていますが、グロ  
ーバリゼーションの流れに合わせた改  
革が求められる一方でそれは結局アメ  
リカ主義の大競争に合わせることに  
なるという見解が目立ちてきているの  
は気になります。寺島実郎さんは「求  
められる当事者意識と真の構想力」(世  
界週刊1/6・13)で、「自前の構想  
力が求められている」として、「明治  
の近代化以来」の歴史を再考する形で  
改革のあり方を問いかけています。  
中西さん グローバリゼーションや  
規制緩和の流れには国家としての生存  
がかかっている。今のグローバルスタ  
ンダードに合わせなければ経済の活力  
そのものが死んでしまい、日本は国家  
として生き延びていけない。改革が日  
本を融解させるという被害意識、文  
化的な抵抗感から後ろ向きになった  
ので、逆にグローバル化をすすればす  
べての問題が解決するといった「ポー  
ーレス世界論」のイメージに簡単に乗  
っってしまうのは、戦後の日本人が、国  
家としての大きな選択に直面した時の  
生命力を枯渇させている現れではない  
でしょうか。中央公論で宮城谷さん  
が「多数決とは、よい意見が多い場合  
に多数決と言った」という中国の古  
典の話を引いていますが、リーダーが  
いて初めて多数決があるのだから、  
そこに意思中枢がなければならぬ。  
橋本さん 日本独自の生存空間を確  
保しなければならぬこと、グロー  
バリゼーションを進めなければならぬ  
こととは、いわば車の両輪です。日  
本の場合、なぜ必要なら改革を断行し  
実行に移すことができないのかとい  
うと、リーダーが一つの機能、役割であ

◆私のお勧め2点◆

(注記した以外の月刊誌はすべて3月号)

橋爪大三郎	山下悦子	中西輝政	編集部
<p>①ポスト冷戦と「日本版歴史修正主義」(上野千鶴子) —論座 歴史は「多元的な現実」との観点から、歴史論争をめぐる論客(私を含む)を次々やり玉に</p> <p>②新説・日本語はこうして作られた(石川九揚) —中央公論 漢字文化を基礎に語彙を充実せよというまともな提言。日本語の中国語起源説はやや強引</p>	<p>①世界は大蔵省をどう見ているか(K・V・ウオルフレン) —中央公論 大蔵省批判を望んでいるのは他ならぬ大蔵官僚、との視点から精密な分析を国民に勧める</p> <p>②てい談 直木賞作家、芥川賞を語る(浅田次郎、出久根達郎、林真理子) —文藝春秋 純文学の読者離れが進む中、「思い出に残る芥川賞作品」の読者アンケート結果を踏まえて</p>	<p>①信長が光秀に討たれた理由(小沢一郎) —諸君! 「大切なものを残すためには、今、変わらなければ」という日本の改革の本質を突く</p> <p>②迫り来る「自治体倒産」時代の恐怖(水木楊) —現代 いまだにダラダラと赤字を増やし続ける地方財政の「愚かなるオプティミズム」への警鐘</p>	<p>①日本 大分裂の時代(内橋克人) —文藝春秋 「改革」のかけ声の下で進む所得格差の拡大や社会的価値観の分裂の兆候に警鐘を鳴らす</p> <p>②座談会 21世紀は「アジアの世紀」か(金親謙、鄭敦仁、劉求貴、橋爪大三郎) —正論 香港・台湾・中国・日本の学者がアジアの将来を展望。アジア内部の異質性が浮き彫りに</p>

雑誌を読む 2月

- 暴発する少年**
- ◆少年A 犯罪の全貌 —文藝春秋  
検事調書掲載が論議的。立花隆氏の「擁護論」も
  - ◆特集 子どもたちの闇(河合隼雄、石川九揚、香山リカ、西山明、永山彦三郎) —アステイオン冬号  
神戸事件は「わかること」の傲慢さへの警告(河合)
  - ◆心理学に群がる人たち(与那原恵) —中央公論  
専門用語で語り合うころの時代は帰属意識の現れ
  - ◆インタビュー「透明な社会」はバラ色か(養老孟司) —ボイス  
親も教師も「人間関係がすべて」のサラリーマン意識
  - ◆ガキに媚びる教育(樽谷賢二) —新潮45 2月号  
大人の子供に対する接し方のソフト化が事件の土壌
  - ◆暴発——長野・少年リンチ殺事件全記録(日垣隆) —現代2、3月号  
連載1、2回。「ありふれた」少年事件の実相を再現

橋爪 深刻な暴力の日常化

橋爪大三郎さん 少年非行の顕著な増加が伝えられる中、「文藝春秋」が神戸の小学生連続殺傷事件の少年Aの供述調書を掲載しました。公表された以上は、そこから何か教訓を読み取ろうとしたのですが、率直に言ってしまうと、少年Aの内面や行動は、やはり「一般の少年非行」と異なる病的な特殊ケースであるという印象が強い。

山下悦子さん 「文春」は供述調書掲載にあたって、立花隆さんの「正常



橋爪大三郎さん



山下悦子さん



中西輝政さん

山下 学校を覆う相互不信

中西輝政さん 養老さんは、昔の少年は自然と社会へ学校を回復して暮らしていたと語っていますが、いつの間にか自然の方は失われた。永山さんは子供らは学校から降りたのだが、降りる

中西 示された倫理の空白

場所がないから暴力が噴き出ると指摘しています。だとすれば、新しい自然、あるいは自由になる場所を確保してやる必要がある。子供らが一定の枠の中で、完全に自由になれる領域をどう作っていくかを考えるべきでしょう。学校の内申書は、そういう自由の領域を一切消滅してしまっています。

橋爪さん 養老さんは、昔の少年は自然と社会へ学校を回復して暮らしていたと語っていますが、いつの間にか自然の方は失われた。永山さんは子供らは学校から降りたのだが、降りる

自由帳

各銀行のMOF担による大蔵官僚の「接待」の内実が明るみに出て、写真週刊誌や雑誌、TVニュースなどでも大きく取り上げられた。「パンパシフィック」銀座店

エリート男性の女性観

もあって。官僚のみならず政治家、一流企業の社員も「接待」で利用していたという。「性」について述べた「接待」が、エリート官僚の性的な「接待」の内実をみる。「女」を「エリート」の著者アレックス・ハーパーは、宴会の座をもたせられた

(山下悦子)





# ナショナルリズム論の契機に

## 長野五輪

- ◆長野五輪右往左往日記(石川保昌) =中央公論  
国際イベントの体験はカネで計れぬ長野県民の財産
- ◆長野五輪にみる自閉した日本文化(浅田彰) =ボイス  
五輪ポスター、開会式の演出を「低水準」と批判する
- ◆長野県民にのしかかる冬季五輪の「負の遺産」(相川俊英) =論座  
16日間の「世紀の祭典」が地元に残した巨大な借金
- ◆原田雅彦の「天才的失速」(二宮清純) =現代  
原田のドラマは、ジャンプの個性的スタイルが原因
- ◆「いい人原田」が捨てた仮面 =アエラ3/2  
リレハンメルが悪夢を振り払うまでの軌跡など特集

中西さん 長野オリンピックは前評判はそれほど高くなかったけれど、意外と見せ場があったり、思わぬ関心呼びました。面白かった、というのが日本人全体の感想ではないでしょうか。石川保昌氏の「長野五輪右往左往日記」(中央公論)からも、そんなトーンを感じました。仕事で出かけていたら、思わぬ感動をしたという文章です。ジャンプの原田雅彦選手は今回のオリンピックの顔でした。「二宮清純氏の原田雅彦の『天才的失速』」(現代)や「アエラ3/2」の特集がこの選手の魅力を描き出しています。彼の軌跡は意地悪く言えば、類型的な物語なんです。それだけに、とてもわかりやすく、肌で彼の体温を感じる人が多かったのではないでしょうか。一方、ナショナルリズムとオリンピックは切っても切れないテーマですが、サッカーのワールド大会に向けて、もっと議論があってもいいように思います。またスポーツとナショナルリズムの結びつきは驚くほど深まっており、そのことを改めて認識した大会でした。マスコミのあり方を含め、これも、議論すべき問題です。

山下さん 日本人が内輪で楽しんでいる印象をぬぐえなかった。外国人選手の活躍やインタビュの模様をもっと見たかったし、海外でオリンピックがどのようになられていたかをもっと知りたかった。会場の自然条件に対して、不満があったとも聞くんですが。そんな中で、オリンピックに少し少した感覚で辛口の分析をした文章が印象的でした。八田利一氏の「小沢征爾の『長野五輪』狂騒曲」(新潮45 3月号)には開会式の呼び物だった小沢氏の指揮による「第九」演奏の裏事情が語られています。妥当かどうかは別として、浅田彰氏の「長野五輪にみる自閉した日本文化」(ボイス)は絹谷幸二氏のポスターと浅利慶太氏演出の開会式を批判していました。

橋爪さん 私は開会式についてある程度肯定的な印象を持ちました。まず、時間が短かった。過去のオリンピックで、長時間の開会式のため選手たちが体調を崩し、競技に影響が出たこともありまし。2時間で切り上げ、選手たちをすわらせた点を評価したい。次に、浅田氏の批判しているジャポニズム的な側面です。長野県でオリンピックをやるのに、これ以外のやり方があるでしょうか。ジャポニズムがひとり歩きすれば問題ですが、伝統日本の音楽や風俗が要領よく登場し、キリスト教とはまったく違う文化的土壌で儀式が行われていると海外では理解されたいと思います。浅利さんの書いたものによる、細かな改革にもじやまをする人がいたらいいですが、そういう中で、あるコンセプトをどまなく打ち出した点は評価すべきだと思います。雑誌では相川俊英氏「長野県民にのしかかる冬季五輪の『負の遺産』」(論座)が財政問題を論じています。IOC(国際オリンピック委員会)の要求などで、規模がふくれあがり、相当な借金が残され、長野県などにツケが回されている。今後追及すべき問題ですね。オリンピックはIOCが仕切って、巨大資本が買い取り、広告代理店がからんでいる。どうしても、マスメディアは甘くなってしまうのでしょうか。

中西さん IOCというのはとつもない存在で、国連をしのぐ財力を持っています。これが一つの方向性を持って世界を変えようとしていることは確かです。また、イラク空爆との関係でも、国際政治の文脈の中で、オリンピックとは何なのかという硬派の視点も、日本人はもう少しもっていないと危ないことになる。

山下さん 少年の凶悪な事件や大蔵省接待汚職などが伝えられるのと並行して、日本人選手たちの活躍が報じられただけに、その真しな姿に救われる思いでした。原田選手には健全な父親が、スピードスケートの清水宏保選手には奮闘ぶりに感動しました。

橋爪さん 日の丸、君が代、天皇のあいさつなどについて批判めいた意見もありますが、そういうのは健全でいいですね。オリンピックは日本がネーションとして存在していることを自覚するチャンスでもあるし、日本以外のネーションを尊重する国際社会の良識を身につけるきっかけにもなる。ただ、個人をたった一つのネーションに所属させるシステムが、国際時代にふさわしいかどうかは別問題だと思えます。